

【書評】

Anne-Claire Hoyng, Turgot et Adam Smith: Une étrange proximité

Paris: H. Champion, 2015, 212 pp.

経済学黎明期の偉人アンヌ・ロベール・ジャック・テュルゴーとアダム・スミスは、ドーバー海峡の兩岸のあい異なる地で生を受け成長するも、やがて花の都パリで出会って意気投合、後年「友情と尊敬の念」（「スミス書簡集」より）をもって接する仲となる。

テュルゴーにしろ、スミスにしろ、研究書を数え上げればきりが無い。二人の経済学の古典形成への貢献が抜きん出ているからである。それに負けず劣らず、この二人の関係をテーマとする研究も枚挙にいとまがない。しかもその歴史は古く、テュルゴーが1781年に没して数年後、かれを「メンートル (Mentor)」と慕ったコンドルセ侯爵や友人のピエール＝サミュエル・デュボンが自著で二人の交友関係に言及している。爾来、19世紀にはテュルゴーやスミスの作品の理論分析はもとより、未発表の文書や書簡などの発掘ともあいまって、二人の「友情と尊敬の念」の研究と並行して、両者の学問的影響や学説の継承の研究も深化した。レオン・セーやジークムント・ファイルボーゲンの著作などはよき例であり、かれらの研究業績は20世紀に引き継がれいくたの優れた作品が生まれた。

本書はオランダの新進気鋭の経済学史家アンヌ＝クレール・ホイニングの学位論文をベースに編集された作品であり、テュルゴー学説のスミス学説への影響という経済学史研究の重要テーマの継承と発展をねらいとしている。ホイニングがここで多分に意識しているのは、フランス東部のメス大学で言語学の教鞭を執っていたジャンヌ・ギャレ＝アモノとニューヨーク大学で経済学を講義したイー・

セー・ルンドベリであるが、本書は先学たちの研究と競っても決して引けを取らない。例えば、本書に「緒言」等の推薦文を寄稿したオランダ経済思想史学会の重鎮にして著者のアムステルダム大学時代の指導教官アーノルド・ヒアージュや遊学先のパリ第5大学（デカルト校）の恩師ジャン＝ピエール・シャムウは、テーマに関連する文献や史料の渉猟に加えて、斯界の専門家や研究者とのインタビューを数多く行い自説の細部を何度も詰め直して作成された力作とまれに見る高い評価をあたえている。

ことほどさように、本書の通読後いの一歩に感じたことの一つは、ホイニングがほとんどすべての先行研究に目を通したうえで、新たに発掘された文献や史料を精査して自説を展開していることであった。いま一つは著者のオリジナリティであり、本書の副題ともなっている、テュルゴーとスミスとの間の「奇妙な符合 (étrange proximité)」を読み解くカギの一つとしてリシャル・カンティヨンの議論を重視していることである。それはテュルゴーにしろ、スミスにしろ、価格メカニズム論の嚆矢カンティヨンの経済理論への評価を惜しまないからというだけではない。結論を先取りすれば、カンティヨンの議論を介して、テュルゴーとスミスとの間の「符合」を拒絶するエドウィン・キャナンやピーター・D. グレーネヴェーゲンに代表される英語圏の研究者を鋭く論難しているからでもある。

本書は、概略、3つの編、6つの章からなり、後続の4つの「付録」を加えても、わが国出版業界のいう「四六版変型」サイズ、約210

ページの小品である。とはいえ、先に示唆するように内容はゆたかであり、テュルゴーとスミスの学問的主張とその意義もさることながら、デイヴィッド・ヒュームやアンドレ・モルレらが二人の出会いとその後の交友関係にはたした役割など興味深い話題に及ぶが、ここで全篇を紹介することはできない。以下、著者のいわゆる「奇妙な符合」の要諦をなすターム“capital”に絞って紹介したい。

ホイングは本書第 1 編「二つのスタイル、二つの著作、相似性」において、テュルゴーの『富の形成と分配に関する諸省察』（以下『諸省察』と略記）とスミスの『国富論』を概説したのち、両者の間に約 20 の「相似性」を認めることができるという。過半はラテン語の“capitalis”語源の“capital”を、師グルネー侯爵（ひそみ）の掣（ひそみ）に倣い「資本」相当の意味で用いた『諸省察』第 29 節「資本一般および貨幣収入」以降の議論に関するものであり、『国富論』第 2 篇「資本の性質、蓄積、用途」の中身とほぼ重なる。特記すべきは、冒頭の篇で土着語の“stock”を「資本」相当の意味で用いたスミスではあるが、第 2 篇では土着語“stock”と舶来語の“capital”とを併用していることである。ホイングは通説に従い、スミスが 1766 年のパリ滞在中テュルゴーたちに経済学の作品を作成したいと話していることからみて、『国富論』第 1 篇はパリ滞在前に構想・執筆されたと解釈する。“capital”を資本相当の意味で用いるようになったのはけだし帰国後であったという料簡である。

なるほどテュルゴーとスミスが直（じか）に語らうを得たのは 1766 年、折しもテュルゴーが『諸省察』を仕上げた年だけであるが、かれのアンヴィル公爵夫人宛て書簡や、ルンドベリの発掘したスミスの同夫人と子息ルイ＝アレクサンドル・ド・ラ・ロシュフーコー公爵宛て書簡にあるように、テュルゴーは後年スミス

に書籍や資料を送り『国富論』の完成を支えていた。ところが、英語圏ではキャンンのようにテュルゴーのスミスへの学問的影響や学説の継承はおろか、後年の交友関係をさえ認めない研究者が多い。ことルンドベリらのいう『諸省察』と『国富論』との間の資本という用語をめぐる構文上の「符合」は、二人が同時代人で、同じ時代の学問や思想を吸収した結果であって「奇妙」ではないと一蹴する。

はたしてそうか。例えば、テュルゴーもその出版に与力したといわれるカンティヨンの作品に資本相当の意味で“capital”が登場したであろうか。否！^{（ん）}カンティヨンの“capital”はせいぜい大金、貸付元本、公債でしかない。キャンンのテュルゴー資本論への暗挑は、藤塚知義の妄信受容するところではあるが、ルンドベリは理論分析に終始せず、^{（ん）}構文論の名で知られる言語学の解析手法を応用して「資本」と「用途」との組合せをテュルゴーの手（せき）蹟と特定し、オイゲン・フォン・バームバヴェルクが『資本積極理論』（1889 年）で主張した「テュルゴーこそは“capital”を資本相当の意味で用いた歴史上最初の人物」説の正しさを証明している。そしてギャレ＝アモノの貢献は先行研究を言語学の見地からより詳細に吟味・検討した点にあり、テレンス・W. ハチソンをはじめ英語圏の支持者も少くない。

昨今「経済学の父は一人ではない」とする説への支持者が欧米諸国で増えている。ホイングの作品の貢献もそこにある。だが、この国はそうではない。按ずるに、邦訳の酷（ひど）さ加減もその一因だろう。谷崎潤一郎の言いようを手本にしていうなら、難解至極（ちんぶんかんぶん）の「化け物的」日本語が思想の伝達を妨げているからにほかならない。

（中川辰洋：青山学院大学）